

# 大文字五山送り火

35期生

## I テーマ設定の理由

幼い頃から、よく京都の町を訪れた記憶があります。そして、その京都で、沢山のお祭り、社寺などを見ました。今では、京都も私の故郷のような気がします。そこで、京都の夏の大きな行事「大文字五山送り火」を調べることにしました。何回か、京都で眺めたことがあるし、私の家の近くからは、夏の夜にほんのりと左大文字が見えます。こんなロマンチックな夏の行事を見逃すことはできないと思いました。

## II 研究方法

- (1) 参考文献で、およその行事の様子を知る。
- (2) 疑問点や詳しく知りたいことを、京都市や保存会の人達に聞く。
- (3) 実際、「五山送り火」を眺めて、その様子を味わう。
- (4) 自分なりのこの行事についての考えをまとめる。

## III 研究結果

### ① 歴史と起源

送り火は現在、東山如意ヶ嶽の「大文字」をはじめとする、松ヶ崎西山(万灯笼山)・東山(大黒天山)の「妙・法」、西賀茂船山の「船形」、金閣寺付近の大北山(大文字山)の「左大文字」、嵯峨仙翁寺山(万灯笼山・曼茶羅山)の「鳥居形」がある。これらは、毎年8月16日夜に点火され、五山の送り火と呼んでいる。

以前には「い」(市原野)・「一」(鳴滝)・「竹の先に鈴」(西山)・「蛇」(北嵯峨・昭和30年まで存在)・「長刀」(観音寺村)など、いずれも小規模だが江戸時代の最盛期には、少なくとも十種類の送り火が山々に点火されていたらしい。

送り火そのものは、再び冥府に帰る精霊を送るという意味を持つ、盆行事の一つである。この行事が一般に広く行われるようになったのは、仏教が庶民の間に深く浸透した中世、室町時代以降であるといわれている。

この送り火についての記録は、公家舟橋秀賢の日記「慶長日件録」の慶長8年(1603)7月16日に「晩に及び冷泉亭に行く、山々灯を焼く、見物に東河原に出でおわんぬ」と記述されているのが初めてである。この「山々灯を焼く」とあるのは、まちがいなく、大文字などの送り火であったと考えられる。

通説では、この夜、松明の火を空に投げ上げて空を行く霊を見送るという風習がある

ので、大文字の送り火は、これが山に点火されたものだといわれる。



### ☆ 大文字の起源

如意ヶ嶽の大文字については、送り火の代表的なものであることから、俗説も最も多い。

#### ○平安初期説

- ① 延暦年間、桓武天皇の頃、鹿ヶ谷靈鑑寺の峰に北辰(北極星)を祭り、木を燃やしたので、今の大文字はその炉の跡であるという。
- ② 弘仁年間、天下飢饉で疫病流行の時、弘法大師がこの山の中央に鉄輪を置き、左右上下に75の火を生松に焼いておこし護摩木に移して、玉体安穩、天下太平、悪気退散を念じた。盆の16日は黒月黒日黒刻なので、これの持つ力を火で後々まで伝えたという。
- ③ 昔、山麓にあった浄土寺が火災にあった時、本尊阿陀仏が山上に飛来して光明を放ったことから、その光明をかたどって点火したものを弘法大師が大の字に改めたという。(都名所図会より)

他の空海による説も、全くの俗説である。(山城四季物語など)

#### ○足利時代説

- ① 足利隆盛の頃、遠望遊観のため点火したという。(俳諧歳時記華資年浪草より)
- ② 相国寺の横川景三が將軍義尚の冥福を祈るために始められたという。また大の字は、横川の筆跡だといわれる。



浄土院

は、寛永13年(1636)生まれで慶長19年(1614)に没している伊尹は、本阿弥光悦・松花堂昭乗と共に当代の三筆といわれた能書家であったことから、この説は有力になっている。しかし、伊尹が能書家であったので、仮にたとえられたのかもしれない。

③ 足利義政の意見で、横川が指導して義政の家臣芳賀掃部が設計したという。(山城名跡志より)

○江戸時代説

「山々の送り火、但し雨ふればのぶるなり。……松ヶ崎には妙法の二字を火にともす、山に妙法といふ筆画に杭をうち、松明を結びつけて火をともしたるものなり。北山には帆かけ船、浄土寺には大文字皆かくの如し。大文字は三藐院殿(近衛信尹)の筆画にて、きり石をたてたりといふ。」

寛文2年(1662)刊行された「案内者」に記されている。

このほか、色々な説があるが、江戸時代説の「案内者」の著者の中川喜雲



都名所図会 安永9年(1780)より



また最近、大文字送り火に関する古文書や大文字山が銀閣寺領であったという資料が銀閣寺から発見された。地元の人はいこれらの記録から、送り火は、室町中期足利義政を創始者とする説が最も正しいと思われるといっている。

② 点火と運営

地元の人達はどのようにして、この送り火を運営しているのだろうか。

☆ 大文字

大文字送り火は、従来から護摩木に自分の名前と病名を書いて火床の割木の上のせてたくと、その病が治るといふ信仰がある。また、消炭を持ち帰って粉末にして飲むと持病が治るともいわれている。それで15日夜から16日朝にかけて、先祖の霊や生存する人の無事息災が護摩木に記される。なお、15日朝から16日昼頃まで銀閣寺門前で護摩木の受付が行われる。

この護摩木は送り火の点火資材として、当日山上へ運ばれ、当夜7時から山上の弘法大師堂でお燈明がともされ、大文字寺(浄土院)住職及び参詣者等の有志により、般若心経があげられる。その後、このお燈明を親火に移し、合図により一斉に送り火が点火される。

◎大文字保存会 会員数……49戸

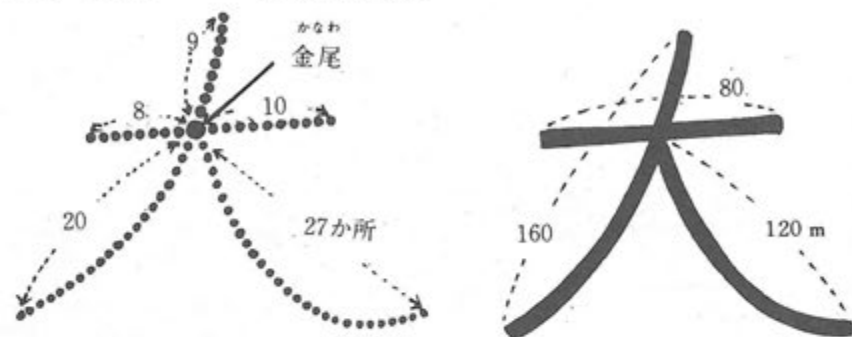
③ 火床

送り火の火床はどうなっていて、どんな構造なのか、点火の資材はどんなものかを調べてみた。

☆ 大文字

① 送り火火床

- 火床数 75カ所
- 面積 約7000坪



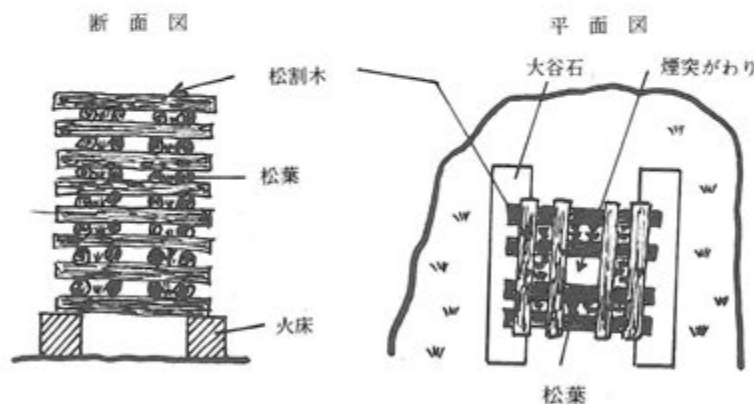
◎ 火床が75カ所なのは どうしてなのか？

大文字の「大」は、仏教で人体を四大<sup>しだい</sup>という大の字で表し、その人格に潜む75点の頭脳を焼きつくし、精霊を極楽へ送るという意味があるので、火床75カ所もそこから設けられたようである。

また、仏教の悪魔退散の意味がある五芒星<sup>ごぼうせい</sup>（星の形）を示したものだろう。

昔から、高い所で火をたくことは精霊が天に帰ると思われていたのと、昔、如意ヶ嶽が相国寺の領地で、また灯は相国寺内の足利家代々の墓を左大文字と共に照らしているのといわれる。

② 火床の構造



以前には土に穴をあけ、その中に薪を井桁<sup>いげた</sup>（「井」の字の形に四角形）に組んで積みあげその間に松葉を入れていたが、昭和44年度から自然の山膚<sup>やまかわ</sup>（山の斜面）に土盛りをし、大谷石を設置している。「大」の中心は金尾<sup>かなわ</sup>といって、特別大きく割木が組まれる。

江戸初期には杭をうち、それに松明<sup>しょうめい</sup>を結びつけて点火していたらしい。（「案内者」）

しかし、寛文延宝の頃に今の積木法にかわつたらしい。（「都歳時期」）

◎大谷石……宇都宮市大谷町付近に産する凝灰岩。淡青緑色。耐久性に富み、火に強い。加工は容易。下水・石垣・倉庫建築用。

③ 点火資材

薪は、松割木を使用。井桁に積み重ね（高さ1.3m）その間に松葉を入れる。そのまわりを麦ワラで囲う。

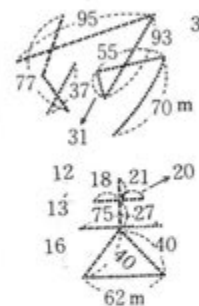
- 薪 600束
- 松葉 100束
- 麦ワラ 100束



大文字



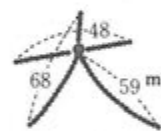
妙法



妙…103基 法…63基



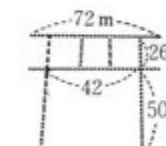
左大文字



53基



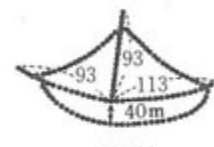
鳥居形



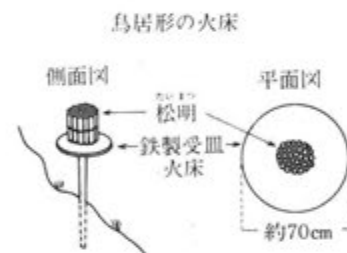
108基



船形



82基



鳥居形の火床

火床の構造は、船形を除き大文字と異なる。左大文字の火床は栗石をコンクリートで固め、妙・法、及び鳥居は鉄製の受皿構造である。また、鳥居の点火材料は、松明<sup>しょうめい</sup>（松の根の部分〈ジン〉を小割にして束にしたもの）を使用している。

☆ 次に、疑問点を京都市役所で聞くことにした。

- Q. 火床整備事業で、どのようなことをしたのか。
- A. 大文字の場合、薪の運搬用の常設リフトや地くずれ防止の排水溝などを設置した。
- Q. 火事などが起こったことはないか。

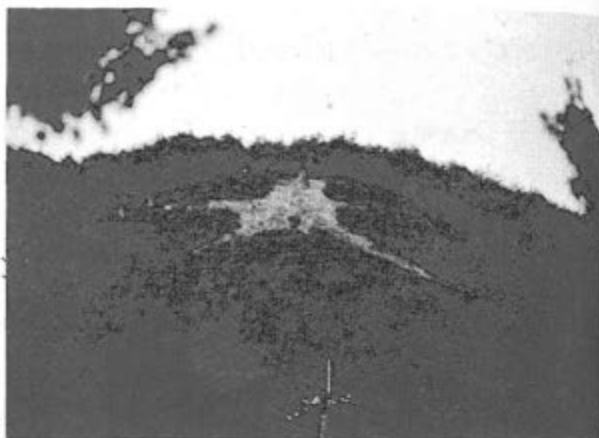
A. ない。

Q. 反対の声、又は中止になったことはあるか。

A. 戦時中は中断されており、昭和10年に順延されたことがある。又、一昨年、費用面などで地元から中止という声があった。

その他、詳しく教えてもらうことができ、よかったと思う。

☆ 京都府以外に、秋田県大館市、大阪府池田市などで、送り火が行われている。



左大文字の山肌

#### IV 結論

古代人が「火」を恐れ、その恐怖から「火」を神秘化し、信仰の対象としたのは明らかだろう。それによって、数々の行事が生まれてきたといえる。それは、大文字五山送り火をはじめとし、灯籠流し、松上げなどである。大文字五山送り火の起源は明らかではないが、たぶん、そのような思想が結びついたのだろう。送り火は権力者によって生みだされたのではなく、庶民が始めたのだといえる。そうでなければ何らかの記録が残っていてもよいと思う。

#### V 総括

私は改めて「火」というものを知った気がする。熱い、恐ろしい、明るい、便利……といった火の持つ性質。それから生まれる「火」への信仰。「火」とは偉大なものだと思った。

また、この送り火を調べていくうちに、私達が楽しむ一つの行事も、沢山の人の力で成り立つことがわかった。京都市、各山の保存会、地区の人々等。

夜空を彩るオレンジ色の炎。京の町は送り火一色に染まった。

各山とも、大文字同様調べましたが、紙面の都合上、残念ながら割愛しました。

☆ 参考文献 カラー京都の祭 淡交社  
京都大文字 社団法人 京都市観光協会

☆ 協力 京都市役所市民相談室相談課  
京都市文化観光局観光課  
京都市文化観光局文化財保護課

#### ◎ あとがき

今年も台風5号接近の悪天候のもと、8月16日午後8時より大文字五山送り火が行われた。人出はやはり例年より少なく、8万9千人だった。ネオンの消灯を呼びかける「平安の鐘」が鳴り響き、午後8時「大」の形が浮かびあがる。オレンジ色の炎が薄ぼんやりと見えた。保存会では、火床にビニルシートをかぶせたり、薪に灯油をかけたたり忙しかったようだ。